

川柳マガジンクラブ東京句会 4月
平成21年4月12日(日) 駒込学園にて

参加29名 出席23名、投句6名

高田以呂波、加藤品子、菊地順風、小倉利江、
村田倫也、水野絵扇、丸山芳夫、河野桃葉、左道
正、星野睦悟朗、藤原栄子、五十嵐淳隆、南野耕
平、
白勢朔太郎、秋山和子、横山きのこ、関 玉枝、
棚瀬くんじ、山田こしい、ヨモギ、二回、植竹団
扇、松橋帆波
欠席投句
正木三路、伊藤三十六、山口千枝子、石田きみ、

自由吟 句評会

言葉出ず席を譲ってはにかむ目 以呂波

若い人がはにかんでいる印象。栄子

恥ずかしがりな日本人を穿っている 耕平

譲っている人を周りから見た絵と読んだ。共感を覚え

る。睦

悟朗

作者 実体験。小さな女の子が声は出さないのだが「ど

うぞ」という瞳が印象に残っている。

もういいよそんなに薄くしなくても 品子

具象がないと判り難い。利江

焼酎や水割りかなと・団扇

何を薄くしたのかが判らない。きのこ

テレビ、髪、珈琲など広がるが、絞れないこともない

が、絞れないから面白いという見方もある。耕平

作者 贅沢という題で作った作品。薄型テレビを想定し

作っただけけれど、その時も伝わらなかった。勉強

に

なりました。

社会面 衝動的 という病い 順風

社会面の「病」なのは。耕平

今のマスコミのあり方を詠んでいるのでは。こいし

衝動的というのが「病」となっている社会状況を上手

く捉えている。正

衝動的という事件が多い中、病という表現が上手い。

きのこ

作者 マスコミのあり方とかという意味ではなく、その

ような記事が目立つということで詠みました。

入学を祝って桜歩を合わせ 利江

入学の風景が目に見えんかんだ。くんじ

川柳にしては素直では。耕平

作者 今年の桜は開花が早かったのに、長持ちし、入学
式の時期に満開になった。その瞬間に詠んだ作品。

街に出て生きた証を拾いたい 倫也

よく分かります。和子

街に出て歩いていると、今自分が生きているという感

じを持つことがあるので選びました。ヨモギ

街に出て人に会ったり、新しいことを知ったりするの

で、

住みなれた街を歩くと過去も見える。

田舎に対しての街なのか、家の中に対しての街なの

か。

耕平

作者 家に籠っているより町へ出たほうが、いろいろな
ことに出会えるのではという願望。

地下鉄で地震に会うとどう逃げる 竜雄

地下から上がる時に思うのですが、サリンなどを思い

出したりします。友人でも地下鉄だから出かけないと

いう人もいます。皆さんは心配ではないのでしょうか。

か。みんなが不安に思っていることを句にしたのは立

派。桃葉

わざと泥臭く仕立ててあるのでは。口に出したくない

ことをあえて句にしたのでは。団扇

プッシュでもプルでも開く無節操 団扇

自分が押されても引かれても落ちてしまう、そういう

自分を卑下するという意味では。淳隆

作者 どちら側にも「押す」と書いてあるコンビニのド

アのこと。

親孝行 親不孝 よりむつかしい 千枝子

川柳らしいと思う。品子

与謝野晶子のテレビ番組で、品子が労働には金銭に換

えられない部分もあるのではないかといったと紹介さ

れていた。この句のむつかしいにはそういった内容も

含まれているのでは。倫也

自分を照らし合わせて全くだなと思いました。こいし

親孝行の難しさというのはどの程度共有されているの

だろうか。耕平

親不孝には、孝行をしない親不孝と、してはいけない

ことをする親不孝がある。親孝行ではどうだろう。団

扇

取り敢えず鏡に見せる赤いブラ 絵扇

派手な下着を身に着けるときに、どうかしらと鏡と相

談している風景。和子

若い女性の勝負下着では。さらりとした表現だが楽し

んでいる感じがする。順風

取り敢えずという言葉は十七音の中では勿体無いの

だが、この句の場合はそれが効いている。揺れる女心が出ている。芳夫
取り敢えずというところにドキリとした。赤いブラと
いうところで還暦を連想。哀愁とニューモアを感じる。

ヨモギ

出かける前に鏡を見て気を引き締めているという感

じ。こ
いし

作者 男性の方の解釈と違ひまして、女性の方の解釈の
通りです。

外道とはひどい釣られてあげたのに 芳夫

魚の視点からの句。着想が良い。淳隆

釣られる側の視点。女性を連想させる言葉遣い。句の
作りが良い。正

作者 初めは、「釣り上げておいてひどいな外道とは」だ
ったのを、あれこれ直しているうちに右の句になりま
した。単なる釣りの句から、夫婦喧嘩の一場面を思わ
せる句になったのでは・・・

この膝の傷が解せない二日酔い 正

共感しました。くんじ

キズよりも二日酔いの方が辛い。以呂波

お酒が好き人には共感が得られる、面白い。睦悟朗

二日酔いでなくてもこのキズどうしたのだろうと思う
ことがある。よく分かります。ヨモギ

二日酔いという表現を考えないで、気が付いた時にあ
るキズのこと共感しました。和子

気付かないうちの傷は二日酔いなら尚でしょう。利江

作者 最初は頬の傷としたのだが、生々しいので膝のキ
ズにした。

倫也

人知れず無縁仏に手を合わせ 栄子

墓としての無縁仏か、魂としての無縁仏か。解釈はい
ろいろあるが、思いがストレートに出ている作品。耕
平

墓参りに行ったときに、無縁仏にも手を合わす。人と
して良い行いだと思う。桃葉

作者 人よりも早くに墓参りに行くので、人知れずとい
うことです。

原色で誘うチラシの超目玉 玉枝

パチンコ屋のチラシを連想しました。栄子

作者の狙いは「超目玉」のところでは。朔太郎

毎日のように入るチラシ。原色で誘うという表現が良

い。
倫也

赤や黄色の原色のチラシ。確かにそうだなと感じま

す。
絵扇

作者 原色のチラシには目が行くが、あまりにもくどい
ものはどうだろう。安すぎるものも消費者としては心
配。

天下りとかけて渡り鳥と解く 朔太郎

九・八の仕立て。上手いと思う。淳隆

時事吟として面白い。こいし

作者 時事吟として作った作品ですが、自由吟の組上で
どのように解釈されるかを見たいと思いました。

今日明日と言えぬ積木の知恵を見る きみ

昔あったアニメ。ドラマの積木崩しのことでは。団扇

花道を忘れていない散る桜 三路

桜が散った後の青山墓地の景色を思い浮かべた。こい
し

花道と捉えたところがすばらしい。散って行く姿が桜
の花道。品子

張りぼての爪が炊いてる無洗米 淳隆

長く飾った爪の若い人でも無洗米なら自炊できるのか
など思った。睦悟朗

ネイルアートで飾っていても、地味に自炊している。

外見とは違うという点で面白いと思う。きのこ

作者 どういう人が無洗米を食べているのだろうと逆に
遡って考えた作品です。

凜としてその日暮しに甘んずる 桃葉

達観した感じが爽やかでいいと思いました。利江

その日暮らしという暗いイメージだが、この句はそ
うではないところが良い。芳夫

凜とするという表現は過去にたくさん詠まれている。

倫也

作者 百年に一度の不況といつても、若い方が生活保護
を受けているのを見ると、もう少し頑張つて欲しいと
思う。大変でも、凜としている人も中にはいるので。

忙しいそう思う時 花のうち 裕美

実感句としていただきました。忙しいときの方が充実
していると思う。栄子

言葉の順。「花のうち」というところが上手くまとめら
れないだろうか。芳夫

忙しくても動けるうちが花のうちかなと自分も思う。

絵扇

仕事をしているときが一番よかったかなと時々思う。

玉枝

「うちが花」ならどうだろう。倫也

泣くための胸を妻には借りられず 帆波

男が泣くことはめったにない。まして妻には。余程の
事があるのだろう。倫也

逆に自分では夫に借りられずと読んで、共感しまし

た。
絵扇

立派なご主人だと思ふ。長い間にあつた色々な事。男の人の切ない句だと思ふ。桃葉

男は辛いなと思ふ。妻に借りられなくて誰に借りるのだろう。実感句では。きのこ

作者 世の中が窮屈になつて居るのかなという印象から、男の人の辛さを表現したかった。

ジャンプ傘。パチンと閉じて恋終る 三十六

若い人が作るような元氣のある楽しい句。利江

女性の決意表明のようなものを感じた。順風

女性の句だと思ふ。男はもつと女々しいので。気持ちのいい句。正

「ジャンプ傘パチンと開き恋初め」のように前向きならしいなと思つた。きのこ

「パチンと閉じて恋終る」という部分に潔さを感じた。芳夫

老いふたり裏も表もない帳簿 くんじ

老いふたりはよくある表現だが、裏も表もない帳簿という表現と合わせたところが、新しいと思ふ。品子

長い時間を掛けて段々同化しあう夫婦。玉枝

負いふたりの人生観。若い頃と違い裏も表もない。それを帳簿にかけたところがいい。朔太郎

老いふたりから年金生活を連想。裏も表もないというのは、そんな余裕のない暮らしと読んだ。以呂波

作者 帳簿という裏を連想しがちな昨今だが、それとの対比での儉しい暮らし、人生観などを考えた。

菜の花を手折つて仰ぐ空の色 和子

空を仰いでいるのは作者。読み手はその空の色から解釈を広げて行く。帆波

菜の花を手折った時に、あえて仰いだ空の色に作者なりの思い入れがあるのでは。耕平

作者 造成地で、沢山の菜の花を手折った時に見上げた空から、普段とは違う印象を抱いたので。

妻も言う私が先に逝きますと 睦悟朗

「も」というからにはお互いにそう言つて居る。耕平

作者 お前も先に逝くと言うのかよ、という情景。助詞止めについては、「妻も」という部分を強調したかったので、この語順になった。

ちやぶ台に相談して居る原節子 きのこ

卓袱台と原節子の取り合わせがいい。順風

昭和の風景を感じる。原節子さんをよく知らなくて、いかにもという情景が浮かぶ。耕平

儉しい小市民の暮らし。小津安二郎の世界。情景が目

に浮かぶ。くんじ
相談しているというのが良い。ただこういつた作りは、数多く作られてしまうのでは、とも思う。芳夫

作者 昭和という題で作りました。小津安二郎の世界から、昭和の正しい暮らしを連想してみました。

首都高に喰われちまつた歩道橋 こいし

中七に引かれた。以呂波

ちまつたという表現に違和感がある。正

作者 首都高の工事で歩道橋が撤去され、横断歩道をこの字に渡らなければならなくなった事を詠んだ。

花びらがほろ酔い一面に舞い降りて ヨモギ

面(つら)という表現はあえて使つたのか。団扇

作者 初め「顔」としていたが、花びらの悪戯の雰囲気が出るかと「面」という表現を試みた。

千年の夢から覚めて花の下 耕平

千年の夢が何を指すのか分からない。団扇

作者 俳句で花といえは桜。では、川柳でも花は桜を指すのだろうか。花の下で西行の歌「ねかはくは 花の

したにて 春しなん そのきさらきの もちつきころ」から死や輪廻というものを連想してもらい、花見の席でよつて寝て目が覚めた風景へ広げてもらえれば

.....

ひとひらのさくらによせるわがおもい 二回

新潟出身の詩人会津八一の平仮名の和歌を思い浮かべた。すつと読んだ後に、七・七音をつけると面白いかなと思ふ。朔太郎

作者 下五「わがおもい」で「思い」と「重い」を掛けてみた。

課題吟 「飛び出す」

佐道 正選

「佳作」

リクルートスーツが春へジャンプする 三十六

咲き誇る春へ飛び出すランドセル 玉枝

先ず現場押っ取り刀事件記者 倫也

道渡るネコに説教届かない きのこ

その昔辞めた会社の株価見る 睦悟朗

飛び出せと言われてもバンジージャンプ

こいし

交差点大阪人はせっかちや こいし
寝坊した朝を急かせるトースター 利江
高速路老いが逆走する怖さ 淳隆
代走の初々しさの牽制死 芳夫
「秀」

絵本からぬっと出て来る魔女の鼻 帆波
怒ったぞ猪木の顎がしゃくれだし 芳夫
胸を張れなにわが飛ばすまいど号 三十六

「特選」

証人が想定外をしゃべり出す 順風

選後評 佐道正

次の作品は。課題から遠いと感じました。

脚光を浴びた少女は逞しい
二番手を照準にする会議室
覚悟しててんとう虫は空へ飛び
即御免条件 反射恐妻家

表現が「そのまま」という印象の作品。

一斉に飛び出す走者ヨードン
退社時のベルと同時に街中へ
親元を離れマンション住まいする
ロケットに乗って家族で月旅行

飛び出すという課題は難しいと思いました。
特選作品のような表現は好きです。

まとめ 松橋帆波